

派遣料理人の戦場レシピ『ダッカー鶏の丸焼き』

——戦場において唯一といえる娯楽は何か？

賭け事？ 仲間との話し合い？ 兵器のメンテナ
ナス？

確かに、そのどれかが娯楽と言える人も少なくない
かもしれない。

しかし、それを世間一般で言うところの『娯楽』と
結び付けられるか——と言われると疑問符を浮かべ
ることだろう。

鉄板に油の弾ける音が調理ルームに響き渡る。調理
ルームは普通の厨房と比べると一回り小さい。それは
彼女一人で歩き回るには充分な大きさだと設計
されているためだ。

とはいえ、普段は——正確に言えば彼女以外の料理
人が派遣された場合は——少なくとも四人が居ない
とこの基地に居る兵士のお腹をスムーズに満足させ
ることは出来ないだろう。

「おぼちゃん、今日の料理は何？」

「今日はダッカー鶏の丸焼きだよ！ というかあんな、暇なの？」

スカーフで頭を包んだ女性は鉄板でじゅうじゅう
音を立てている鶏肉の塊を菜箸で動かしながら、カウ
ンター越しに話をしている兵士に言った。

なぜ兵士かと言うと、この場所は戦場だったからだ。
現に今も砲弾の音、爆撃の音、指揮をする兵士の声が
至る所から聞こえてくる。

まさに戦争の真只中。

それにも関わらず、この兵士は調理ルームに居た。
「……暇、というわけじゃないんだよね。何というか、
今の戦争ってこういう風に食事をする余裕だつて出
てきたわけだろ？ それつてつまり、暇な兵士が幾ら
か出てきてもおかしくない、というわけ」

「働きアリの原理かしら？ ……まあ、それはいいわ。

もし暇だったら手伝ってくれない？ 急に料理の変更を言われてしまったものだから、皿を拭く時間も無くて。もし忙しいのならば別に任せることはしないけれど」

「いやいや、大丈夫ですよ。俺は忙しくないから」

そう言って兵士はすぐ横にある扉を開けて、調理ルームの中に入ってきた。

「あ、あと消毒液をきちんと両手につけてから作業してね。戦場で食中毒なんて起こされたら溜まったものじゃないし、たとえ私が悪くなくても私が悪くなるのよ。それくらい理解してほしいものね」

「……解っていますよ、それくらい」

そう言って兵士は扉横のテーブルに置かれている消毒液のボトルをプッシュして、自分の手に消毒液を何滴か垂らした。垂らした後はそれを両手に馴染ませていく。馴染ませた後はそれを見せつけるように女性の居る方向に突き出した。

「はい、これで問題ないでしょう？」

「常識の範囲内の行動を、自慢するんじゃないよ。皿を拭く専用のタオルは食器棚のところに掛けてある

やつを使ってね。もし床に落としたらそれを洗濯カゴに入れて、両手を消毒してから、新しいタオルをとること。いいわね？」

「大丈夫ですよ。もう二回目ですよ。それくらい、言われなくたって……」

「何度も言っておかないと、仮に出来なかつた時が大変でしょう？ だからこそ、私は何度も言っているの。だって私がこの厨房の管理を行っているのだから」

「そうですね……。まあ、まじめなことはいいことですよ。少なくとも不真面目なほうよりかは問題ないと思いますし」

兵士は大量にある皿を拭くべく、タオルを手にとった。

それを見ていた女性は、ようやく作業を再開した。



料理が完成したのは、それか一時間後のことだった。そのころにもなればソースの匂いで兵士の胃袋は音を鳴らしていた。

「ねえ、ちょっと味見してもらえないかしら？ ソースの味付けはどうも私一人で決めるのは良くない気がするのよね。やはり実際に食べる兵士の人たちに味を見てもらわないと」

それを聞いた兵士は「はい！」と大きく声を出して、もともとあった場所にタオルをかけて女性の前まで向かった。

女性の前にあるテーブルにはすでに鶏肉のスライスと、それにこげ茶色のソースがかかっていた。ソースは温められているのか、湯気が出ていて、そしてとても美味しそうな香りがする。

「いただきますか？」

それを聞いて女性はこくりと頷く。

「そのために君を呼んだのだからね。どうぞ食べてくれたまえ」

そして兵士は鶏肉のスライスをフォークで刺すと、そのまま口に入れた。

口に広がる塩気と、それから少し遅れて感じる刺激。どこかフルーティな香りもする。

「……どうだ？」

「これ、フルーツとか使っている感じですか？ とってもフルーティな香りがしますけれど」

「そう。さすがだね、これにはリモネンという爽やか系……酸味を追加するためにそれを利用した。ほかに？ ほかに気付いたポイントは？」

女性は目を輝かせて兵士に訊ねる。

兵士は目を瞑り、考えながら、ゆっくりと言葉を紡いでいく。

「ああ……あとは塩気が良い感じですね。これは魚醤ですかね？ 魚の香りがするとか、なんとなく、ではありますけれど……。海が近いところに住んでいた僕にとっては、これはかなりいいなあ、って思えますよ。特にここは砂漠のど真ん中ですからね。ただ、塩気を少し強めにすればいいのかなあ、とは思いますが」

「塩気が強め、ね……。私としてはけっこういい感じに強くなったのだけれど、まだまだ足りないということね。まあ、確かに兵士のみんなは汗をかくから、塩分を消費するし、仕方ないか……。よし！ ありがとう。あとはいいわ、夕食のタイミングを楽しみにしてね！」

そうして兵士は再び皿を拭く作業に、女性は兵士から言われたポイントを修正すべく調理を再開した。



夕食の時間。

兵士にとって娯楽ともいえる時間である。

その時間になると食堂はすぐに満員になる。入りきれなくて列を作っている兵士も居るほどだ。

そうなるとう食堂は大盛況になり、女性一人では正直こなすことは出来ない。……それが普通の女性ならば、出来ないとはつきり言うことだろう。

しかし彼女はほかの人間に調理を任せることは出来ないとして、一人だけで厨房の運営を賄っている。軍部は何度も増員を検討しているが、彼女のほうからそれを断っているの、人を増やしようがない。

「いや、今日も美味しかったね！ 味付けが濃くて、ライスにぴったりだったよ」

食器の返却はセルフとなっているので、兵士自らが返却口までもっていくスタイルとなっている。

そこで兵士は、女性に向けてそう言った。女性はルーティンワークをこなしながら、兵士の言葉に笑顔で頷く。

彼女にとって、人が喜んでもらえることは自分が嬉しいことと等しいことだった。

そしてそれは、皿拭きを手伝った兵士も知っていた。そして、兵士は。

(やっぱり、かっこいいなあ……)

その姿に、ひそかに恋をしていたのだった。派遣料理人に恋をすることは何ら間違っていないが——戦場では恋愛という経験は皆無なのだ——そもそも彼女の名前など、兵士は知らなかった。

そのあと、兵士はある些細なことをきっかけに、派遣料理人の名前を知ることになるのだが——それはまた、別の話になる。

終わり